

1. なぜ成長を目指すのか

- 国民生活の質や水準を維持
- 規模縮小による「縮小スパイラル」に陥ることを回避
- 経済規模を拡大—規模の経済、集積の経済、交流の経済が働く

2. 何もしない場合の未来像

- 労働投入の成長への寄与はマイナス(年平均▲0.9%程度)
- 高い水準の資本ストックのため資本係数上昇の余地は小さい
- TFP(全要素生産性)の寄与も小さい(年平均0.6%程度)

3. 成長・発展メカニズムの基本的な方向性

□ 制度の変革を推進しイノベーションが連続して生じる経済を実現

- ・ 「多様性」の尊重と「つながり」が確保されるオープンで柔軟な制度への変革
- ・ 広範な領域でイノベーション創出、ベンチャー育成
- ・ 大学発の知的財産、技術シーズの有効活用

□ 伝統と創造・技術と知恵・多様性とのつながりによる生産性の向上

- ・ 知識資本投資の拡大
- ・ ブランディングやマーケティングの強化
- ・ オリンピック・パラリンピックの機会を最大限活用し日本ブランドを発信

□ 増大が見込まれる潜在需要の確実な取込み

- ・ 医療・バイオ分野
- ・ エネルギー環境分野

□ グローバル・バリュー・チェーンにおける付加価値の取込み

- ・ 新興国の成長等の世界経済の構造変化への対応

□ 金融機能の強化

- ・ 新陳代謝の促進、金融の目利き機能
- ・ 国際金融センターとしての地位の確保

4. 持続的な成長を可能にするための基盤

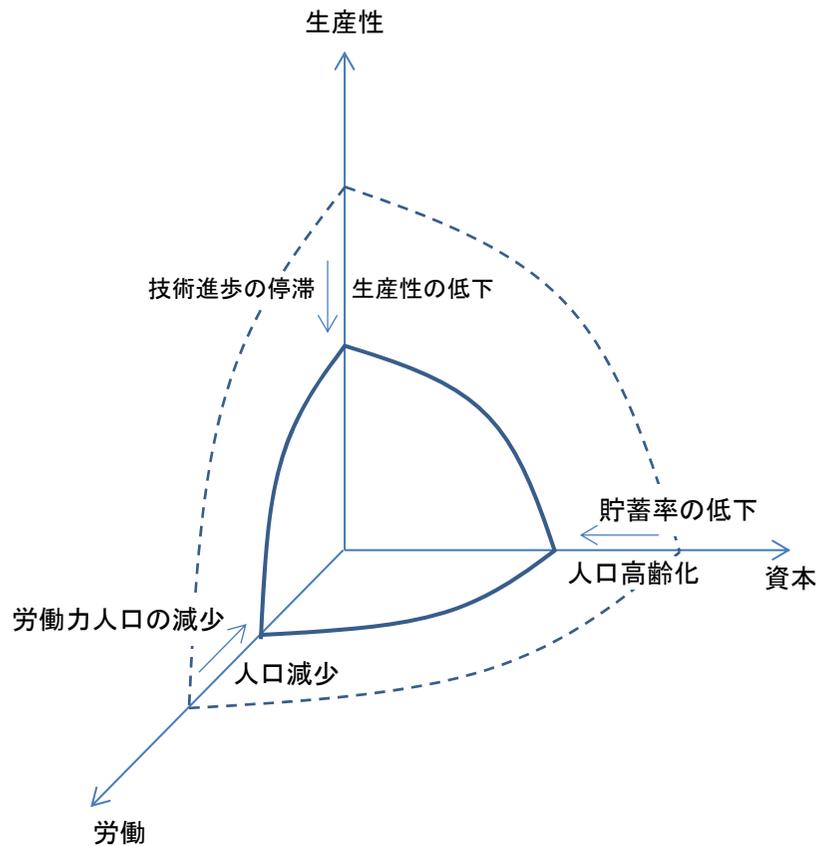
- 市場メカニズムを基本に据えた成長
- 経常収支赤字の可能性を視野に入れた経済財政運営
- 「日本」、「日本人らしさ」の尊重

- 格差の拡大・固定化を回避して多様性とのつながりを高める
- エネルギー制約・環境制約を克服し、チャンスに変える

成長・発展の未来像

- 人口減少や、貯蓄率、技術進歩率の低下等によって、現状のままでは日本経済の成長・発展力が弱まることは不可避。
- マクロ的には、①生産性の上昇、②労働参加率の上昇、③貯蓄から投資の流れや、対内投資の増加等が望まれる。特に、生産性をどこまで高められるかがポイント。
 - ⇒ 伝統と創造、技術と知恵、多様性をつながりによるミクロレベルでの付加価値生産性の向上
 - ⇒ オープンな国づくりによる世界経済の成長力の取り組み
 - ⇒ これらにより、ダイナミックな産業構造の変革、産業・企業の若返り

○現状のまま何もしない場合の未来像



○選択の後の未来像

